

佳作

世界の飢餓

茨城県 北茨城市立関本中学校二年 小林 佑輔

作文の題材に困り、インターネットを開いてみた。「世界の飢餓」に目が止まりホームページを見てみると、飢餓に苦しむ国の写真があった。僕は悲しい気持ちになった。そこに写っている子ども達は、ご飯を食べていても笑っていない。どこかうつろな表情だった。僕は「食べ物に困らない」事が、幸せの条件になっているのだと思った。

世界では、全人口の八人に一人が飢えに苦しんでいる。しかも、飢えが原因で五秒に一人の子どもが死んでいるのだ。僕には想像もつかない現実である。でも、日本の結婚式では、料理の四分の一が捨てられているらしい。僕はあまり好き嫌いはないが、弟達は度々ご飯やおかずを平気で残す事がある。日本では毎年一千万トンもの食べ物ゴミになっている。これは、日本で一年間に食べている米の量と同じである。こんなに食糧が余っているなら、日本が飢餓に苦しむ国々に食糧を輸出すれば問題は解決すると思っていたが違っていた。

日本は逆に、食糧の六十%を輸入している。先進国で最も高い割合だ。たくさん輸入して、たくさん捨てているのだ。例えば、みんなが好きなハンバーガーは、パンの材料の小麦の八九%、牛肉は六四%輸入している。一キロの牛肉を生産するために、十一キロのトウモロコシのエサが必要だ。そのトウモロコシの何分の一かが人間のために栽培されれば、多くの人が飢餓から救われる。僕たちの食事は世界とつながっているのだ。

飢餓をなくすために出来る事はないか。それは、食べ物を絶対にゴミにしないことだ。「ご飯や給食は好きな物だけ食べないで、何でも残さず食べること。みんなで実行すれば、一千万トンの食糧を輸入しなくてすむかもしれない。僕の家近くの

スーパーでは、地元野菜のコーナーがある。僕の家も農家で、毎日、祖父母がそのスーパーに野菜を配達している。「新鮮でおいしい」と大評判だという。

でも僕は、もっと違う意味があると思う。地元でとれた米や野菜や魚を食べるということは、それだけ無駄に食糧を輸入しなくてもすむということだ。外国のためではなく、自分たちの命のために食糧を作ってもらうこと、そして限られた食糧をみんなで分け合って食べる事で、飢えに苦しむ人たちを少しでも救うことができると思う。

食べ物を粗末にすると、父母は「もったいないから残すんじゃない」と怒るけど、飢餓に苦しむ人たちの事を思うと、「もったいない」の本当の意味が分かったような気がした。

